性障害陰影と合わせて偽像形成の可能性もあり診断時の注意が必要と考えられた．

臨床例において，骨シンチグラフィー，^{67}Ga 腫瘍シンチグラフィー，副腎シンチグラフィーなどで特に有用であった．骨シンチグラフィーでは骨と肋骨，膀胱と仙骨などとの重なりの分離，^{67}Ga シンチグラフィーでは特に腹部の腸管との重なりの分離に優れ，副腎シンチグラフィーでは，投与3日後で鮮明な像が得られた．今後，out put の電算機との接続により，横断像の作成も可能であり，本邦でも普及する装置と考えられる．

42. β-TG リアパックの使用経験

石原　明　中崎　利彦
（天理よろづ・RI）
高橋　豊
（同・血液）
浜田　哲
（同・内分泌）

β-Thromboglobulin (β-TG) は，血小板 α 顆粒中に含まれる血小板に特異的な蛋白であり，血小板の放出反応に際して放出される．今回 β-TG RIA kit を入手することができたので，基礎的検討および，各種疾患における β-TG の検討を行なったので報告する．

検体は，静脈血 2.5 m*l* を駆血帯なしで手早く採血し，EDTA，ラオフィリン溶液を加えたプラスチック試験管内で転倒混和し，直ちに氷水中におき，2～4°C，2,000 g，30分間遠心後，上清 500 μ*l* を分離し冷凍する．μ-TG 値は，駆血帯をして採血した時と，抗凝固剤と混和後，室温に放置した場合，軽度に上昇した．また，静脈穿刺に失敗し，2回穿刺した場合には，測定値は著しく上昇した．3種類の検体を用いた同時再現性，異なる kit を用いて測定した日差再現性の変動係数は，それぞれ平均 6.27%，6.52% であった．希釈試験では，230～6.5 ng/m*l* まで良い直線性を示し，回収試験でも平均 97.7%の回収率が得られ，精度の高い検査法と思われる．血小板数との比較では，血小板数が少なければ低値を，多ければ高値を示した．血小板動態との相関は悪く，明らかに血小板破壊亢進が見られ血小板寿命が短縮している ITP でも，β-TG 値は低値であった．

正常人の β-TG 値は，19.1±9.0 ($\bar{x}$±S.D.) で，その他の少数症例では，ITP はやや低値を，AIHA，IDA，直性多血症ではやや高値を示し，肝硬変，バンチ症候群，他の脾腫では，正常であった．

43. β-Thromboglobulin radioimmunoassay の基礎的および臨床的検討

末廣　謙　垣下　栄三
永井　清保
（兵庫医大・2内）
福地　稔
（同・RI）

生体内における血小板機能検査の一方法として，血小板から血漿に放出される β-Thromboglobulin (以下 β-TG と略す) を RIA 法で測定する方法が確立されている．今回われわれは β-TG リアパックにつき基礎的および臨床的検討を行なったので，その成績を報告する．

本キットの標準曲線は Assay ごとの再現性が良好であり，各点における変動係数は 5.2% 以下であった．さらに，血漿試料に既知量の β-TG を添加したさいの回収率は，平均 97.1±9.3% と良好であった．また，β-TG 高濃度血漿の希釈曲線と標準曲線は，よく平行性を示した．同一 Assay 内における再現性は，平均変動係数が 5.9%，異なった5回の Assay 間における再現性では，平均変動係数が6%であり良好な再現性を示した．

β-TG 値は採血方法により影響をうける．そこで健常人の採血時における駆血帯使用の有無による影響を検討したが，両者に有意な差異はみられなかった．

さらに本キットによる健康人および各種疾患の血中 β-TG 値の測定を行なった．健常人では平均

Presented by Medical*Online

18.1±8.2 ng/m*l* であったのに対し，血栓症，動脈硬化症，早期の DIC，さらに真性多血症や CML などの症例では有意の高値を示した．このことより，これら疾患において β-TG 値測定は疑固亢進状態を検する一指標としての有用性を示す成績を得た．

44. 血漿ベータートロンボグロブリン測定用試薬の検討と臨床的有用性について

小川　正　金尾　啓右
本田　稔　石原　静
（住友）

血漿ベータートロンボグロブリン(β-TG)の採血ならびに測定条件に関する検討を行ない，種々臨床例において β-TG 値の検討を行なった．乏血小板血漿の作製は，低温かつ短時間処理の必要性を認めた．なお，測定には β-Thromboglobrin Riapac を使用し，intraassay error 4.4%，interassay error 10.5%，回収率，97.9%と良好であった．

β-TG と血小板第4因子の間には r=0.67 の正の相関を見た．

17例の健常例の血漿 β-TG 値は平均 30.4±15.2 ng/m*l* であった．これに反し血栓性静脈炎では，151.9±35 ng/m*l*，脳梗塞では 137.3±61.4 ng/m*l*，動脈硬化性動脈閉塞症では 147.9±46.3 ng/m*l* といずれも高値を呈した．糖尿病97例では，平均 82.9±65.7 ng/m*l* と統計学的には健常例に比べ，有意に高かったが，正常値とのかさなりも多く見られた．なお糖尿病コントロールの良，不良，細小血管症の有，無では，有意差を見なかった．

さらに，1例の深部血栓静脈症では，その臨床経過と β-TG 値がよく一致した．

45. CG, SLCG radioimmunoassay の基礎的および臨床的検討

木戸　亮　福地　稔
森田　俊孝　西川　彰治
木谷　仁昭　中原　啓
佐竹　秀逸　永井　清保
（兵庫医大・RI）

Cholylglycine (CG) と Sulfolithocholylglycine (SLCG) の radioimmunoassay の基礎的ならびに臨床的検討を行なった．

異なる10回の測定で得られた標準曲線の検討では，安定性，再現性共に満足できる結果であった．Incubation 温度の検討では，CG では高温となる程低濃度領域で B% が低下し，逆に SLCG では高くなる成績であった．Incubation 時間の検討では，CG, SLCG 共に検討範囲内では有意の差異は認められなかった．Interassay および Intraassay における再現性は，CG でおのおの平均 3.2%，11.8%，SLCG で平均 3.5%，9.2% であった．血清試料に既知量の CG または SLCG を添加した際の回収率は，CG で平均 104.8%，SLCG で平均 101.7% であった．血清試料を希釈した際の希釈曲線は，CG および SLCG 共におのおのの標準曲線と平行性を示すことが確められた．臨床応用の成績では，健常人10例の空腹時血中 CG および SLCG はおのおの 16.5±7.8 μg/d*l*，26.7±15.1 μg/d*l* で，これに対し96例の各種疾患では，肝細胞障害が強いほど CG, SLCG 共に高値を示す傾向が得られたが，亜急性肝炎，高度の閉塞性黄疸および先天性胆道拡張症では，SLCG は著しく低値を示した．

Presented by Medical*Online